

ミシシッピの Emmett Till 事件と「乾燥の九月」

—文化のかたちとしての構造化された暴力—

田 中 久 男

はじめに

アルフォンソ・ピンクニー (Alphonso Pinkney) の『アメリカ暴力史』 (*The American Way of Violence*, 1972) は、原語のタイトルが示唆するように、暴力のアメリカ的な表れ方を扱った代表的な研究書である。著者はアメリカ社会の体質と暴力との緊密性を捉え、その具象例として、「インディアンの大量虐殺と黒人の奴隷制度から、20世紀なかばの広島と長崎の住民にたいする爆撃、さらに現在のインドシナの貧しい農民とブラック・パンサー党の殺戮」に言及し、こうした「暴力行使のような現象は、個人が手を下すにしても、制度から来るものである」¹⁾ と述べて、アメリカ社会の制度的な暴力の噴出を問題視している。その制度の元凶として彼はカルヴィニズムを挙げ、「この宿命論の政治的な重要性は、指導する側と従う側が神の意志によって定められており、(中略) この教義は人種によって優劣が決まっているという考え方と結びついて、黒人の奴隷化とインディアンの根絶を正当化した」と洞察し、二元論的に峻別するカルヴィニズムの体質が「社会進化論の流行によって補強された」²⁾ と分析している。

このように確かにピンクニーの問題意識は鋭いし、例証も豊富であるが、暴力とその集合的な発生源としてのカルヴィニズムや社会進化論との結託のメカニズムについての論述が希薄で、暴力の症例研究のような結果となっている。その意味では、ピンクニーの問題意識を受け継いだ元山千歳氏たち4人による『アメリカ文学と暴力』³⁾ は、ひとつの優れた研究成果を示している。ポー、トゥェイン、ヘミングウェイ、ベロー、マラマッドの各文学における暴力表象を、歴史的な文脈の中で、作家の社会的な側面や創作ヴィジョンに結び付けて緻密に分析している。しかし、それでも何かが

欠けている感は否めない。おそらくそれは、アメリカの深南部で深く構造化されている熱い暴力文化と、その根源にある人種偏見の風土を直視した文学の分析がないことに起因していると思われる。

集団的に構造化された暴力として私たちの頭にすぐ思い浮かぶ典型は、ユダヤ人撲滅を目指したホロコースト (Holocaust) と、アメリカの黒人奴隷制度 (Black Slavery) であろう。その2つが、「反人類」(anti-human)、「反生命」(anti-life)⁴⁾ という相において、人類が犯した2大絶対悪 (absolute evil)⁵⁾ であるという認識を、『ソフィーの選択』(*Sophie's Choice*, 1979) で形象化したのが、南部ヴァージニア出身のウィリアム・スタイロン (William Styron, 1925-) である。「奴隷制度と強制収容所には、制度の、専制制度 (despotic institutions) の特質があった⁶⁾ と述べる彼は、アウシュヴィッツで突出した強制収容所という制度の悪を、ユダヤ人の特殊な経験であるホロコーストという言葉に直線的に還元されないように注意しているが、それでも、ナチによるユダヤ人撲滅政策には、紛れもなく反ユダヤ主義 (anti-semitism) という硬直した理念がまとい付いていたことは、否定しようのない事実である。しかし、ここではその詳しい跡付け作業は、本稿の主題から逸脱するので差しひかえたい。ただ、社会学の分野においては、「暴力の主体を特定の間人又は集団に帰することができず、暴力が非対称的な構造のなかにビルトインされていて、それが不平等な力として、したがって不平等な生活機会として現れ、死や障害、苦痛など直接的暴力の行使による効果と同様な効果をもたらす場合⁷⁾」を、「構造的暴力」(structural violence) という概念で捉えるようであるが、筆者が構造化された暴力 (structured violence) という場合、人種の偏見や宗教的挟隘等によって人々の精神を縛るように社会に組み込まれた間接的な力と、それらが複合的に作用して噴出する直接的な暴力をもさす概念として使用している。いわば、フランスの哲学者ルイ・アルチュセール (Louis Althusser) 流の重層的決定 (overdetermination) という概念で呼ばれる、家族や教会のレベルを通して浸透するイデオロギー的国家装置に近い概念である。つまり、彼は「イデオロギーは人々の行為の中に刻み込まれており、その限りで経験的世界で物質的に存在している」が故に、「学校、家族、教会などのイデオロギー装置をとおして物質化され固定化される」と解釈し、イデオロギー装置として捉える国家を、「<公私>の領域を問わず、様々な領域の隅々にまで網の目のように広がる網状組織⁸⁾」として規定したが、本稿で筆者が用いている構造化された暴力とは、この網状組織のように社

会に深く浸透して人々の精神を支配し歪めているイデオロギー装置と、それが暴力として具象化する社会的様態のことである。

そこで本稿では、まず、アメリカ文学の具体的なテキストに反ユダヤ主義が表出しているエピソードを探り、それが構造化された暴力として精神的に大きなトラウマとなっている様相を考察する。次に、黒人奴隷制度の遺産に絡まる暴力の諸相を、主として深南部ミシシッピでの現実の事件と、同州出身のウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897-1962) のテキストに求め、それらが構造化した暴力文化として、南部人の精神を呪縛している内実を考究することを目指す。

1. 反ユダヤ主義のトラウマ

「ギリシャ語の〈アンチ〉(反)と〈セミツ〉(ユダヤ人)を1879年にドイツのヴィルヘルム・マー [Wilhelm Marr] が合成し、それまでのユダヤ人に対する憎悪を表す言葉としたことに由来する」⁹⁾ 反ユダヤ主義 (anti-Semitism) という近代的な概念は、2000年に及ぶキリスト教文明を基盤とした西欧社会において、為政者と民衆のレベルでのユダヤ人に対する宗教的、人種的偏見が複合的に結集して、社会的に構造化された価値観あるいはイデオロギーとして表出した現象を名づけたものである¹⁰⁾。ジャン＝ポール・サルトル (Jean-Paul Sartre) が、「ユダヤ人はなによりも、先ず社会的人間である。なぜなら、彼の苦しみが社会的なものだからである。彼をユダヤ人にしたのは、神の摂理ではなく、社会である」¹¹⁾ と、歴史的に特異な目で見られたユダヤ人の社会性をことさらに強調するのも、人間社会の異端者、ディアスポラ (Diaspora) と見なされることになったユダヤ人の宿命を、歴史的、社会的な表徴と見るからである。このような反ユダヤ主義が共産主義への恐怖や狂信的なナショナリズムに煽られて、全体主義ドグマとして噴出したのが、あのナチズム (Nazism) であり、その結果としてのホロコーストであったと、乱暴な俯瞰図を承知で総括することはできるだろう。まさに反ユダヤ主義は、個人的な好悪の感情や単なる差別的処遇を超えたイデオロギー装置として、社会的、文化的暴力となった巨大な典型である。

例えば、ヘミングウェイの長編第1作『日はまた昇る』(*The Sun Also Rises*, 1926) に登場する嫌われ者のユダヤ人ロバート・コーン (Robert Cohn) は、子供があり離婚歴があるにもかかわらず、周囲の人間の感情に鈍感で疎まれ役として描かれているために、読者の同情を引くことはな

い。つまり、このテキストでは彼の疎まれる要因が、反ユダヤ主義という長い歴史の尾を引く社会的心理現象と結び付けられることはなく、あくまでもコーン個人の資質の問題として扱われている。少なくとも物語の展開の中ではそのように見える。だが注意深い読者は、ニューヨークで最も裕福かつ最古参のユダヤ系一族のメンバーである彼が、ボクシングなど毛嫌いしていたにもかかわらず、「プリンストン大学でユダヤ人の扱いを受けた際の劣等感と気後れの感情を打ち払うために、苦勞して徹底的にボクシングを習得した」¹²⁾ 結果、大学ではミドル級チャンピオンだったという作品冒頭部の説明を、意義深く認識するだろう。このコーンは、プリンストン大学の最初のユダヤ人学生ハロルド・リーブ (Harold Loeb) をモデルとして造型され、ちょうど小説の中で、主人公のジェイク・バーンズ (Jake Burns) たちがブレット・アシュリー (Brett Ashley) を挟んで、心身両面で鞘当てをしたように、ヘミングウェイとリーブとの間でも女性を挟んでの確執があったことが、作者の自伝的エピソードとして確認できる¹³⁾。ここでわれわれが注目すべきは、コーンという疎まれ役を使った作者の執念深い報復感情などではなく、コーンが大学に入って初めてユダヤ人であることに目覚めたという認識の衝撃であり、その啓示的事実である。つまり、プリンストンに行くまでは彼には見えていなかった、だが社会に隠然と存在し構造化されている反ユダヤ主義の感情に遭遇して、放浪の民族 (Wandering Jew) とかディアスポラとしての血を引くユダヤ人の民族特有の宿命とアイデンティティに目覚めたということである。

大学でコーンが認識した厳しい反ユダヤ主義的雰囲気との度合いは、ニューヨーク知識人の一人ライオネル・トリリング (Lionel Trilling, 1905-1975) が、同じくプリンストン大学で経験したユダヤ人としてのアイデンティティの危機と苦汁の物語を知れば、容易に想像できることである。母校の同大学で講師を勤めながら (1932-38)、マシュー・アーノルド (Matthew Arnold) について卓抜な博士論文を仕上げた彼は、「フロイト主義者、マルクス主義者、ユダヤ人」¹⁴⁾ という理由で英文科から排斥の憂き目に会ったところを、1939年に学長の裁量でテニユア職の助教授に留まることができたのである。1948年に正教授に昇格した彼は、あとは周知のように、文学研究を文明という広い視野におさめた学究姿勢で、プリンストン大学の看板教授にまで上り詰めて行くが、英文科でテニユア職を得るという榮譽に浴した最初のユダヤ人であるというその経歴の背後には、ユダヤ人であるという一点で彼が辿った複雑な苦しいドラマが覗いて見えるのである。

ロバート・コーンが味わったのと同類の認識の衝撃は、もっと生なましかたちで、先述の『ソフィーの選択』に登場するネイサン・ランドー(Nathan Landau)という精神の揺れの乱高下を繰り返すユダヤ人に刻印されている。ハーヴァード大学の修士でファイザー(Pfizer)生物学研究所の研究者という偽の肩書きで生きている彼は、実は研究所の図書館員で、妄想性精神分裂病者(paranoid schizophrenic)¹⁵⁾であることが、物語の展開の中で明かされ、虚像と実像で揺れる人物として設定されている。さらに、ナチの政権獲得(1933年1月)以後、ユダヤ人排斥運動の勢いが加速する時代情勢の中で、彼が家族と激しい口論の末に放火事件を起こした挿話と、彼の衝動的な参戦願望が家族の反対で挫折したこととの因果関係と¹⁶⁾、ユダヤ人としての彼のアイデンティティへの目覚めと、それゆえに若い彼が覚えたはずの衝動的な民族的ナショナリズムとの関係とが平行なものだということが、テキストの中で強く暗示されている。ネイサンはアメリカに亡命したポーランド女性ソフィーとの同棲生活において、彼女の死の願望を払いのける天使的な庇護者の役割と、一方で彼女がアウシュヴィッツを生き延びた秘密を、ユダヤ人として執拗に問いたださずにはいられない悪魔的なネメシス(Nemesis)役の両方を演ずるが、そうした振幅の激しさは、アイデンティティに目覚めた認識の衝撃と折り合い切れない彼の内面の葛藤が表出したものである。確かにこの小説は、作者をモデルにした作家志望の語り手スティンゴ(Stingo)が彼らと絡む三角関係のメロドラマ的要素がなくはないので、下河辺美知子も紹介しているように、「人々の意識を、その非人間性・残虐性に直面させることから巧妙にはぐらかしているとの指摘もある」¹⁷⁾ 作品ではあるが、ソフィーとネイサンが心中するという選択は、まるで2人が反ユダヤ主義というとてつもなく大きいイデオロギイ的暴力の呪いを、死によって解き放つしかなかったかのように悲劇として昇華されている。

2. 黒い皮膚のトラウマ

以上述べたコーンとネイサンというユダヤ人の民族的な出自への覚醒と内面の傷にもっと精緻な告白的な声を与えれば、フランツ・ファノン(Franz Fanon, 1925-1961)の体験と同類のものとなり得る。フランス領アンティル諸島のマルティニク島出身で、高い教養を身に付けたエリートの精神分析医ファノンは、「ほら、黒人よ(中略)ママ、黒人が見えるでしょう!」と言って幼い白人少女が彼に対して見せた人種差別的「身動き、態

度、眼差し」¹⁸⁾ に接して、自分がステレオタイプ化した黒人像に落とし込まれたこと、つまり、「黒人」という人種の抽象的なシニフィアンに包括され、無機的な存在になったことの認識の衝撃を告白している。このトラウマとなった原体験の意味を分析した『黒い皮膚、白い仮面』(*Black Skin, White Masks*, 1967) は、皮膚の黒さが、好悪の感情を超えて、黒にまつわる西欧文明の価値観や宗教的ヴィジョンを引きずる巨大なステレオタイプという文化装置の中で、汚れとして呪縛されている歴史的背景を見事に解明している。すなわち、サタンは黒であり、「黒は醜悪、罪、暗黒、不徳と等式である」¹⁹⁾ が故に、黒人はそうした負の事象の象徴だと見なす文化の、特にキリスト教文化の集合的無意識の偏向に支配されてきた歴史をファノンが呪いつつも、黒人が偏向に満ちた白人の視線を意識することで内面化し、いっそうそれに自縛されるという心理の悪循環を克明に考察している。そのメカニズムをホミ・K・バーバ (Homi K. Bhabha) は、ミッシェル・フーコー (Michel Foucault) の言説概念とジャック・ラカン (Jacques Lacan) の心理学とを援用しながら、先にファノンが言及した「少女の視線は黒人類型を認知し、それを否認しつつ、母親へ戻ってゆく。黒人の子供は自分自身から、自分の人種から顔を背けて、プラスのものとしての白さと全面的に同一化してゆくのだが、それは色であって、しかも色ではない。植民地の主体は、否認と固着の行為をかいして、想像界のナルシズムに、完全な白人というかたちをとる理想の自己との同一化にたち戻ってゆくのである」²⁰⁾ と説明し、「彼 [ファノン] の言う人種は、植民地の言説内にあるマイナスの差異の消しがたい記号なのだ。〈人種〉というシニフィアンが、人種差別として固定されたかたちでしか循環、分節化できないようにしてしまうのが、ステレオタイプなのである」²¹⁾ と、ステレオタイプに固着した視線の暴力性を究明している。

ファノンにより「身体的な呪い」²²⁾ と捉えられた皮膚の黒さに関する言説が、アメリカ社会でイデオロギー的文化装置として機能する暴力を問題にしたのが、トニ・モリスン (Toni Morrison, 1931-) である。彼女はそれを「黒人であることの苦痛」(the pain of being black) と題されたインタヴューで、次のように説明している。

ヨーロッパからやってきてアメリカ人になる際に、移民がお互いに共有していたのは、この〈私〉に対する軽蔑です。——それは、皮膚の色以外の何ものでもないのです。(中略) アメリカ人になるという

ことは、ひとつの態度、つまり、私のような黒人を排除することを基盤にしています。(中略) 移民が船を降りて覚える二つ目の言葉はくニガー>でした。(中略) どんな移民でも、自分がどん底に落ちることはない、と分かっていました。少なくとも一つのグループよりは上にいくはずだと——それが私たち黒人だったのです²³⁾。

ここでモリスンは、人種と階級が絡まったアメリカ社会の構造的な暴力性を暴いているが、精神治療医のマイケル・アダムズ (Michael Adams) も、「皮膚の色は<人種>というシニフィアンの顕著な、おそらく最も目立つ指示物である。このために色による区別 (colorism) は人種差別の特に致命的な類のものである」²⁴⁾ と、黒い皮膚の色の特異性とその衝撃性を分析している。構造主義批評家ツヴェタン・トドロフ (Tzvetan Todorov) も、「現代の生物学にとって、<人種>という概念は役に立たない。しかし、この事実は人種差別主義者の行為には効力を持たない。つまり、彼らは自己の軽蔑心や攻撃性を正当化するために、科学的な分析ではなくて、最も表層的で顕著な身体的特徴 (それらは<人種>と違って、まさに存在するのだ) —すなわち、皮膚の色、体毛、体格の違い—を喚起する」²⁵⁾ というふうに、他者との差異をことさら身体的な外貌に依拠しようとする人間の性癖を洞察している。この人間の視覚に根ざした根源的の偏向がモリスンの第一作『青い目が欲しい』 (*The Bluest Eye*, 1970) のモチーフであるが、彼女は『白さと想像力』 (*Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*, 1992) という講演集において、その根源的の偏向がアメリカの白人作家の想像力を集散的に支配している言説を果敢に暴いた。

3. 人種の序列化の言説

以上見たような偏向が人種の序列化、階梯化を生み出す力になったことは容易に想像できる。モリスン自身、「<人種>は陰に陽に容認されているにもかかわらず、今なお言葉にすることのできない事柄である」²⁶⁾ と徹底に見定め、「人類の進化の階梯で特権化された位置を占めた白さ」²⁷⁾ と、欧米の白人の意識にこびり付いている偏向をえぐり出し、タブー視されている人種の序列化と、それが心理的な暴力になりうる現実の隠された問題に、あえて人々の注意を喚起した。この序列化の問題は、本論の冒頭で紹介したピンクニーの解釈、つまり、正義と邪悪、天使と悪魔等、人間事象を2極に選別したがるアメリカ社会のピューリタニズム、特に厳格なカル

ヴィニズムの体質と、それが社会進化論の流行によっていっそう補強されたという文脈に深く関わるものである。

人種の序列化の言説の起源は、ヘンリー・ルイス・ゲイツ (Henry Louis Gates, Jr.) によって、「全ての人間の知を体系化しようとする衝動 (それが啓蒙時代の特徴である) が、黒人を存在の大いなる連鎖 [the great chain of being] の低い位置に落とし込めるということに直線的に行き着いてしまったのだが、それは、植物、昆虫、動物から人間を通過して天使、それから神自身へと全ての生きものを垂直の階梯に配列した古い構築物である」と解説され、「1750年までにはその連鎖には細かい目盛りが施され、人類の階梯は<最下底のホットトット> (南アフリカの黒人) から<栄えあるミルトンとニュートン>へと上り詰めるものであった」²⁸⁾ と同定されている。それを18世紀から19世紀前半にかけてのアメリカ的なコンテクストで捉えた異孝之は、「キリスト教的な神が創造したとする<存在の大いなる連鎖>をダーウィンの文脈における<存在の大いなる連鎖>へ巧妙に塗り替えていくプロセス」において、「アフリカ生まれの黒人はヨーロッパ人種すなわち<人間>よりは低次の存在として、しかしオランウータンすなわち<猿>よりは高次あるいはオランウータンと同等の存在として定位されてきた」²⁹⁾ と、具象的に見事なパースペクティブを付与して解釈している。

このダーウィンの文脈がイギリスの哲学者ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer) により、社会に適用された社会進化論の影響力を、「暗黒大陸の神話」について考察したパトリック・ブラントリンガー (Patrick Brantlinger) が、人類学との関連において明快に説いている—「人種の差異に関するディシプリンとしての身体人類学と民族学の発展は、1860年代以降、ダーウィニズムと社会進化論によって強化された。こうした<科学>は探検家や宣教師たちが表明したステレオタイプを強固にした。進化人類学はしばしば、アフリカ人は、人間でなくはないし、違った種ではないにしても、非常に劣った<種族>なので、<高度の影響>を受けやすい」³⁰⁾。こうして白人種による人種の序列化の言説がイデオロギー装置として、モリスンが問題視するように見えざるかたちで人々の意識を縛り歪めてしまう支配力を持つことになったのである。

以上、紙数の関係で、人種の差異化、序列化の (擬似) 科学的な言説の流れを、単純化を承知でごく圧縮して追ったが、こうした言説が、アメリカ南部の独特な宗教文化、フランスの社会学者ピエール・ブルデュー

(Pierre Bourdieu) が提起した概念で言えば、ハビトゥス (habitus)、つまり集合的な生活習慣、あるいは生活感覚のようなものに遭遇して、南部人の精神を狹隘にする力を重層決定的に発揮したこともまた十分想像できることである。というのは、南部にはウィルバー・J・キャッシュ (Wilbur J. Cash) が特異な心性として捉えた熱い宗教的風土が存在するからである。「バイブル・ベルト」との蔑称を広めたその宗教文化は、柳生望氏の説明によれば、「<根本主義> [Fundamentalism] とよばれるもので、プロテスタント正統主義の最右翼をなすものである。(中略) その特徴は保守的<信条>よりも、極めて感情的な、時として粗暴な宗教態度にある」³¹⁾ という特徴を有し、その文化の中で育ったキャッシュは、「われわれ南部人が求めたものは(中略) 自分自身と同様に単純で感情的な信仰であった。人々を集団化し、黙示録的な壮麗な言い回しで彼らを恐れさせ、深淵に投げ込み、救い出し、最後に絶叫する彼らを神の恩寵の囲いの中に連れ込むような信仰」³²⁾ と冷徹に捉え、南部の宗教の狂信性、それにより露呈する現実への盲目性を告発し続けた。

1925年のテネシー州デイトン (Dayton) でのスコープス裁判 (the Scopes trial) で有名になったように、進化論を排し、聖書の教義を原理的に解する根本主義は、白人優越主義 (white supremacy) という偏狭な人種差別的なイデオロギー装置を生産しやすく、事実、聖書解釈において、白人と黒人を支配する側とされる側という二項対立の選別思想を持ち込み、黒人を劣等種と同定している。すなわち、弟殺しのカインが神から受けた印 (「創世記」第4章第5節) が、黒人の黒い皮膚に転化されて、黒人が神から呪われた存在という神話を生んだ。一方、ハムの子カナンがノアから呪いをかけられ、「彼はしもべのしもべになって、その兄弟たちに仕える」 (「創世記」第9章第25節) という聖書の逸話を根拠に、「奴隷制度が神の言葉から生まれた制度」という解釈を導き出し、その呪われたハムが黒い皮膚のカインの子孫と結婚、つまり人種混淆により自分の人種を汚したという罪の故に、「黒人は白人に仕えるべき運命にある」と解されたのだ³³⁾。

4. エメット・ティル事件とフォークナーの「乾燥の九月」

文化の多様性を誇るアメリカにおいて、単一の人種の価値観で人間の行動様式を規制しようとするこの白人優越主義は、例えば1881年テネシー州において鉄道列車で黒人と白人を区別する法律が制定され、またたく間に

南部諸州にも広がり、社会の構造化された暴力として南部人の精神の姿勢を色付けることになったが、このいわゆるジム・クロウ法 (Jim Crow law) に対する異議申し立ての歴史的な裁判が、1896年の「プレッシー対ファーガソン事件」(the case of Plessy v. Ferguson) で、「分離すれども平等」(“separate but equal”) の原則が、1955年に最高裁で違憲判決を下されるまで、南部の暴力文化のイデオロギー装置として機能した風景を、マーサ・バンタ (Martha Banta) は、次のように描写している。「人種 (白人と黒人) 間の関係を支配するきっちりとしたエチケットの規範が——適切な行動規範を決めるジム・クロウ法という形態と、そうした規範を逸脱する者は全て罰しようとするリンチと暴徒の暴力という儀式において——再建期以降のアメリカで実施された」³⁴⁾。

後に触れるウィリアム・フォークナーのリンチを擁護するような手紙を問題視したニール・R・マクミラン (Neil R. McMillen) とノエル・ポーク (Noel Polk) は、「彼の時代のリンチは、アメリカ国家の問題ではなく、南部という地域固有の問題であった。1880年～1930年間に記録に残っている約4700件の全リンチのうち、4000件が南部で起こっている。1880年代にアメリカで起こった全リンチの82パーセントが南部で起こったものが、1920年代までには、95パーセントという数字に上昇している」³⁵⁾ と、ジム・クロウ法とリンチという儀式の合体が、半ば儀式化されたシステムとして、フォークナーが生きた時代の南部の人種問題の核心にあったことを統計的に確証している。その合体の現実版の典型が、エメット・ティル (Emmett Till) 事件であり、フィクション版がフォークナーの短編「乾燥の九月」(“Dry September”) である。

エメット・ティル悲劇は、北部の大都市シカゴのサウスサイドで生まれ育ったエメット・ティルという14歳の少年が、1955年夏にミシシッピ州グリーンウッド近くの片田舎町マニー (Money) の叔父を訪れた際に、店で21歳の白人女性に話しかけたか口笛を吹いたということで、それが「性的侮辱と解され」³⁶⁾、その女性の夫と腹違いの兄弟によって殺害され、しかも殺害者は全員白人の陪審で無罪になるという、公民権運動に火をつけるきっかけになった歴史的事件である。陪審制度と白人優越主義の結託の好例は、無実の黒人青年トム (Tom) が有罪にされてしまう、1930年代の深南部の田舎町を舞台にしたハーバー・リー (Harper Lee) の『アラバマ物語』(To Kill a Mockingbird, 1960) にも見られる。50年代半ばの隣のミシシッピ州の人種間の緊迫した雰囲気感触を、C. V. ウッドワード (C. V.

Woodward) の名著『ジム・クロウの奇妙な生涯』(*The Strange Career of Jim Crow*, 1966) によってまず把握しておく、「[国内で] 黒人という少数民族の最大人口をかかえ、黒人人口が過半数を超える最後の州であるミシシッピ州は、また連邦政府の中でもっとも貧しい州であった。(中略) アメリカでこれまで見られなかったほどの警察国家に近い閉塞した社会である。そこの黒人は絶えず恐怖におびえて暮し、白人は州政府が助成する市民会議 [Citizens Council] が解釈する白人優越主義というドグマに盲従して生活していた。1955年には3人の黒人がリンチに遭った」³⁷⁾ というほど、おぞましい差別構造 (Jim Crowism) の中に閉じ込められていた。それゆえエメット・ティル事件は、「白人の共同体にとっては、それが全米に知れ渡ったという理由から、黒人にとっては、子供でさえも人種差別や頑迷さや死からも安全でないということを示したという理由で、黒人と白人双方のミシシッピ州の根幹を揺るがす事件であった」³⁸⁾ という声が代弁するように、深南部の醜悪な暗部を一気に明るみにする衝撃力を持っていた。国務省の文化大使のかたちで同年8月に長野や東京を訪問後、マニラ経由でローマに入ったフォークナーは、この事件をアメリカ人が生き延びるに値するかどうかの試金石になるものと捉え、「もしアメリカのわれわれが、理由がどうであれ、皮膚の色がどうであれ、自暴自棄になった文化の中で子供を殺さなければならぬ極限にまで達してしまっているのなら、われわれは生き延びるに値しないし、生き延びることもないだろう」³⁹⁾ との悲憤を込めた慨嘆文を、『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』の9月9日号に発表した。

1950年にノーベル文学賞を受賞後は、世界の冷戦構造の中でヘミングウェイに代わるアメリカ文学の顔として、アメリカ流の自由や民主主義を宣伝する役割を担って公的舞台上に出るようになったフォークナーは、50年代の公民権運動で揺れる政治の嵐の中で、人種統合問題のような複雑な厳しい課題は、ゆっくり時間をかけて解決しようとする穏健で中立的な立場を唱え貫いた。しかし、人種の政治学の喧噪の中で、「北部ではフォークナーは<漸進主義者> [gradualist] と呼ばれ、南部では<黒人びいき> [nigger-lover] というレッテルを貼られ」⁴⁰⁾、左右両陣営から激しく批判されたが、それでもエメット・ティル事件という郷里ミシシッピの人間性の試金石となる醜悪な体質の噴出を黙認できなかった作者は、「私の郷土の苦境の深刻さが、わが国の他の人たちは理解できないばかりか、私たちにそれが深刻であるということすら信じることができないようだ」⁴¹⁾ と、南北

戦争後、歴史の新たな転回点にあって生まれ変わる苦しみにある南部の疎外状況を憂う、悲壮感に満ちた書簡を文学代理人に宛てている。

黒人作家ジェイムズ・ボールドウィン (James Baldwin) が、「彼〔南部人〕は一方では自由社会の誇り高い市民であるが、他方、露骨で残忍な圧制の必要性から自らを解放する勇気のない社会に縛られている」⁴³⁾ と、北部のリベラル派の代表として、また、二流市民に貶められていた黒人たちの公民としての自由や権利の代弁者として、南部の後進性を糾弾し正義を叫ぶとき、それが南部人を追い詰め、暴力的な沸点に達するほど防衛機制 (defense mechanism) が働くメンタリティを引き起こすという背理に、フォークナーは十分意識的であった。同じ意味でノーベル賞作家トニ・モリスン (Toni Morrison) も、現実のエメット・ティル事件を30年後に『夢見るエメット』 (*Dreaming Emmett*) という演劇に仕立て上げたとき、そうした背理に気付き、アメリカ社会の最もホットな人種問題の扱いには慎重になっていたと思われる。というのは、事件を忠実に再現する写実的なドラマではなく、殺害された無名の黒人少年が死の世界から蘇ってきて、自分の存在の意味を歴史に回復しようとする、絶えず人物が交差し時間と空間が入れ替わるという劇の創りに、現実の血なまぐさい事件を単なる主義主張やイデオロギーの道具として使うのではなく、芸術作品として昇華し、それによって逆に読者の心に深く沈潜し持続的な記憶となっていくことの強さと意義を、モリスンは認識していたと思われるからである。テキストとしては残されなかったこの作品に関して作者にインタビューを行ったマーガレット・クロイデン (Margaret Croyden) は、「その劇は歴史に対する疑問を提起する。30年前のミシシッピの少年の殺害は、アメリカの黒人と白人双方の魂が共有できる集合的な悪夢となりえるだろうか。過去はあまりに現在と遠くかけ離れていて、後のどの世代もその過去を認識できないのだろうか。歴史は単に曖昧さと忘れやすさを生み出す夢にすぎないのだろうか」⁴³⁾ と、モリスンを代弁し解説している。奴隷制度のゆえに命を落とした6,000万人の黒人の鎮魂として、歴史に埋もれた彼らに声を与え、忘却の淵からその声を蘇らせようとした『ベラヴィッド』 (*Beloved*, 1987) が、「国民の健忘症」 (national amnesia)⁴⁴⁾ への鉄槌を意図したように、『夢見るエメット』も、歴史的な事件が時間の腐食作用という暴力によっても簡単に風化してしまうことへの、作者の精一杯の異議申し立てでもあるのだ。

フォークナー文学の初期短編の傑作「乾燥の九月」は、第一次世界大戦

の元兵士マクレンドン (McLendon) が主導して、30歳代後半の独身の白人女性ミニー・クーパー (Minnie Cooper) が黒人ウィル・メイズ (Will Mays) にレイプされたという噂を根拠に彼を殺害するリンチ事件と、どうやらその噂を掻き立てた張本人の彼女が、何の変哲もない母と叔母との田舎町での日常生活の中で、かつての華やかな青春時代の幻想に取りすがりながら、その失われた華を町での噂の広まりの中で取り戻し、その余韻を映画の銀幕のきらびやかな幻影に浸りながら玩味しようとする物語とが交互に進展する作品である。対位法的な構成、イメージやシンボルの的確な使用、男と女の伝統的な住み分けの世界の特徴、映画産業が片田舎にもたらす文化の影響力の洞察等の文学的な配慮を見るだけでも、芸術的な完成度が高いことは明らかで、とても白人優越主義がもたらしたリンチ事件の物語と単純化して格下げできるものではない。しかし、少なくとも本論の主題であった「文化のかたちとしての構造化された暴力」の重層性を見事に映し出した作品であることは間違いない。テキストにおいてレイプの噂は、「血のような色をした9月の黄昏時に、62日間も続いた日照りの余波の中で、枯れ草に火を放ったように広がった」⁴⁶⁾と書き出され、黒人男性と白人女性に関する南部の伝統的な神話の言説、つまり、「白人女性と黒人男性との併置は、ほんのわずかの人種混淆、あるいは人種やジェンダーの逸脱の可能性をも押さえ込もうとする南部社会の狂気じみた努力を生み出した」とダイアン・ロバーツ (Diane Roberts) が説く神話の支配下に読者は引き込まれる⁴⁶⁾。この構図は、まさに Emmett Till 事件や『アラバマ物語』に見られたパターンと同類であり、『八月の光』(Light in August, 1932) のジョー・クリスマス (Joe Christmas) とジョアナ・バーデン (Joanna Burden) との関係にも使われているが、ジム・クロー法とリンチの結びつきが、黒人に人種のエチケットを厳守させようとする白人社会のトラウマのような妄念と病理を反映している。

黒人メイズを弁護する散髪屋のホークショー (Hawkshaw) を「黒んぼびいき」とののしり、店にいる男たちを「起こったかって？そんなことはどっちだっていいんだ。お前たちはほんとに起こるまで、黒んぼどもをそのままにしておこうっていうのか？」⁴⁷⁾と洗脳し、まさにホモソーシャルな空間の雰囲気やリンチという儀式に向かう発火点にまで高めて行くマクレンドンの表面的な勇しさは、南部のいにしえの神話の一つである騎士道精神 (chivalry) や名誉 (honor) の感覚を遠く暗示し、また逆に時代錯誤となったそれらをパロディ化していると思われるが、白人優越主義を基盤

とする権力構造が、南部白人の精神の中で、「聖なる白人女性性という概念」(the concept of sacred white womanhood)⁴⁸⁾ や黒人劣等種等の言説と結び付いて重層的に決定されている風土を映し出している。「マクレンドンやその仲間たちがメイズをリンチするのは、メイズの行為に対する共同幻想の方が、事実に基づいた証拠よりもより真実だからである」⁴⁹⁾ とジョン・T・マシューズ (John T. Matthews) が分析するように、ジェファソンという同質的な小さな共同体の一つのリンチ事件とその余波を描いたこの短編は、南部社会の集合的無意識のようにになっている人種幻想の暴力的な支配力を見事なまでに象徴的にえぐり出した作品である。

おわりに

この作品の対位法的構造が、もしエドワード・サイード (Edward Said) の言う「対位法的な意識」⁵⁰⁾ を映し出しているとすれば、作家フォークナー自身は自己を相対化し、白人優越主義を脱中心化できる精神の位相にあったと思われるが、先述の彼の1931年の書簡は、もっと違った作家の像をあらわにしている。「乾燥の九月」が1931年1月に『スクリブナーズ』(Scribner's) に発表されてから一か月後、問題の書簡はメンフィスの日刊紙『コマーシャル・アピール』(Commercial Appeal) の1931年2月15日号に、「リンチは阻止できる」という W. H. ジェイムズ (W. H. James) という黒人の投書への応答として掲載されたもので、「暴徒は正しいときもある」という表題付きである。その表題通り、この書簡の核心は最後に、「私はリンチを弁護するものではない」と断りつつも、「金持ちのまま死んでいく者もあれば、仕事の休暇となるように、ガソリンをしみ込ませた枕木にかけられて死んでいく者もある。が、暴徒について一つ奇妙なことがある。わが陪審員同様、彼らにもそれなりに正しいところがある」⁵¹⁾ と述べたくだりである。当時の厳しい人種のエチケットが社会の差別構造の中で遵守されていたことを考えれば、共同体の共通した価値観から逸脱することを許さない偏狭な「南部の精神」が、作者自身の意識にも重圧をかけていたのだろうか。

屈折した表現を用いたこの書簡を読み説いたマクミランとポークは、「おそろくわれわれにできる精一杯のことは、天才的な能力にもかかわらず、フォークナーもやはり、あらゆる点において、白人の隣人たちと同様、ミシシッピの市民で、個人と共同体の生活において、必然的にその共同体の価値観を共有していたと認めることである」⁵²⁾ と同情的に読解している。

この書簡を含めてフォークナーの人種についての一連の発言やエッセイを
 検分したテレサ・M・タウンナー (Theresa M. Towner) も、ポークたちの
 見解に同調しているようである⁵³⁾。私の見解では、第二次大戦後に『墓地
 への侵入者』(*Intruder in the Dust*, 1948) で、ルーカス・ピーチャムとい
 う人種のエティケットを守らない誇り高い黒人が、フォークナー文学の中
 で前景化してくる頃から、そしてさらにノーベル賞受賞によって公的舞台
 に登場する50年代から、作者の人種意識や黒人の描き方に変化が起きたよ
 うに思われるが、郷土に対して愛憎半ばする感情を抱いていたように、
 「白人は決して実際には黒人のことを知ることはできない」⁵⁴⁾ とさめた洞
 察をしていたフォークナーは、黒人に対しても内面では折り合い切れない
 愛憎や憐憫が入り交じった複雑な感情を認識していたのかも知れない。そ
 の詳細は紙数の関係で拙著に譲り、本論はここで留めておきたい⁵⁵⁾。

註

- 1) アルフォンソ・ピンクニー、大島良行訳『アメリカ暴力史』(早川書房, 1972年),
7. Alphonso Pinkney, *The American Way of Violence* (New York: Random House,
1972).
- 2) 同書, 21.
- 3) 元山千歳・金谷良夫・清水一雄・佐川和茂『アメリカ文学と暴力—ポウ／トゥエ
イン／ヘミングウェイ／ペロウ／マラマッド』(研究社, 1995年)。
- 4) William Styron, "Auschwitz," in *This Quiet Dust and Other Writings* (New York:
Random House, 1982), 304.
- 5) 「絶対悪」という概念は、『ソフィーの選択』の巻頭におかれたアンドレ・マルロー
(Andre Malraux) のラザロ (*Lazare*, 1974) の一節, "... I seek that essential region
of the soul where absolute evil confronts brotherhood" に由来するもので、スタイ
ロン創作ヴィジョンの核心でもある。
- 6) Ben Forkner and Gilbert Schricke, "An Interview with William Styron," *The Southern
Review*, 4 (Autumn 1974), 931.
- 7) 盛岡清美、塩原勉、本間康平編『新社会学辞典』(有斐閣, 1993年), 433.
- 8) 柳内隆・山本哲士『アルチュセールの<イデオロギー>論』(三交社, 1993年),
184-85.
- 9) 日本マラマッド協会編『ホロコーストとユダヤ系文学』(大阪教育図書, 2000年),
7.
- 10) 反ユダヤ主義の歴史的背景については、J. P. サルトル、安堂信也訳『ユダヤ人』
(岩波書店, 1956年)、河野徹『英米文学の中のユダヤ人』(みすず書房, 2001年)
の巻末の「エピローグ—反ユダヤ主義は妄想か現実か」(328-43頁)、および、本
間長世『ユダヤ系アメリカ人—偉大な成功物語のジレンマ』(PHP 研究所, 1998
年)の第3章「反ユダヤ主義の系譜」(47-80頁)が、簡潔ながら参考になる。
- 11) サルトル, 166-67.
- 12) Ernest Hemingway, *The Sun Also Rises* (New York: Charles Scribner's Sons, 1926),

3.

- 13) James Nagel, "Bret and the Other Women in *The Sun Also Rises*," in Scott Donaldson, ed., *The Cambridge Companion to Hemingway* (Cambridge: Cambridge UP, 1996), 89.
- 14) Gregory S. Jay, "Lionel Trilling," in Gregory S. Jay, ed., *Modern American Critics, 1920-1955, Dictionary of Literary Biography*, Vol. 63 (New York: Gale Research, 1988), 273.
- 15) William Styron, *Sophie's Choice* (New York: Bantam Books, 1980), 518.
- 16) 同書, 519.
- 17) 下河辺美知子『歴史とトラウマ—記憶と忘却のメカニズム』(作品社, 2000年), 361.
- 18) Frantz Fanon, *Black Skin, White Masks* (New York: Grove Press, 1967), 109.
- 19) 同書, 192.
- 20) ホミ・K・バーバ, 富山太佳夫訳「他者の問題—差異, 差別, コロニアリズムの言説」, 富山太佳夫編『文学の境界線』(現代批評のプラクティス—4) (研究社, 1996年), 191. Homi K. Bhabha, "The Other Question: Difference, Discrimination and the Discourse of Colonialism," in *Out There: Marginalization and Contemporary Cultures*, ed. Russell Ferguson et al (New York: The New Museum of Contemporary Art, 1990).
- 21) 同書, 190. サルトルは, ユダヤ人について, 「彼等は, 自分達について他人が持っている特定の表象に, 毒されるにまかせ, 自分達の行為が, その表象に符号することを恐れながら生きているのである。(中略) 即ち, 彼等の言動は, 常に, 内部から, 過剰に規定されているのである」(118)と, 他者の視線の毒を内面化するユダヤ人の心理のメカニズムを解き明かしている。このサルトルの分析は, トニ・モリスン (Toni Morrison) の『青い目が欲しい』(*The Bluest Eye*) の Pecola の人物造型からも分かるように, 白人が押しつける肖像によって黒人が自らを<劣等種>と裁定して内面を毒する危険性にそのまま当てはまる。
- 22) Fanon, 111.
- 23) Boni Angelo, "The Pain of Being Black: An Interview with Toni Morrison," in Danille Taylor-Guthrie, ed., *Conversations with Toni Morrison* (Jackson: UP of Mississippi, 1994), 255.
- 24) Michael Vannoy Adams, *The Multicultural Imagination: "Race," Color, and the Unconscious* (London: Routledge, 1996), 13.
- 25) Tzvetan Todorov, "'Race,' Writing, and Culture," in Henry Louis Gates, Jr., ed., *"Race," Writing, and Difference* (Chicago: U of Chicago P, 1985), 371.
- 26) Toni Morrison, "Unspeaking Things Unspoken: The Afro-American Presence in American Literature," in Harold Bloom, ed, *Modern Critical Views: Toni Morrison* (Philadelphia: Chelsea House, 1990), 203.
- 27) 同書, 216.
- 28) Henry Louis Gates, Jr., "Editor's Introduction: Writing 'Race' and the Difference It Makes," in *"Race," Writing, and Difference*, 8.
- 29) 巽孝之『アメリカ文学史のキーワード』(講談社, 2000年), 126-127.
- 30) Patrick Brantlinger, "Victorians and Africans: The Genealogy of the Myth of the Dark Continent," in *"Race," Writing, and Difference*, 201. 『社会進化論』(研究社, 1975年)に収められた本間長世氏の解説「社会進化論とアメリカ」(5-24頁)は有益な文献。

- 31) 柳生望『アメリカ文学と終末の世界—脱・荒野の幻想』(ヨルダン社, 1972年), 158-60.
- 32) Wilbur J. Cash, *The Mind of the South* (New York: Vintage Books, 1941), 58.
- 33) 井出義光・明石紀雄編『アメリカ南部の夢—ニューサウスの政治・経済・文化』(有斐閣, 1987年), 90-91.
- 34) Martha Banta, "The Razer, the Pistol, and the Ideology of Race Etiquette," in Donald M. Kartiganer and Ann J. Abadie, ed., *Faulkner and Ideology: Faulkner and Yoknapatawpha, 1992* (Jackson: UP of Mississippi, 1995), 173.
- 35) Neil R. McMillen and Noel Polk, "Faulkner on Lynching," *The Faulkner Journal* 8.1 (Fall 1992), 11.
- 36) Margaret Croyden, "Toni Morrison Tries Her Hand at Playwriting," Danille Taylor-Guthrie, ed., *Conversations with Toni Morrison* (Jackson: University Press of Mississippi, 1994), 218. この事件の背景についての情報は, Kwame Anthony Appiah and Henry Louis Gates, Jr., eds, *Africana: The Encyclopedia of the African and African American Experience*, 2nd ed. Vol. 5 (Oxford: Oxford UP, 2005), 165, および, 次のサイトで得られる。
<http://shs.westport.k12.ct.us/jwb/Collab/CivRtsWeb/Till.htm>
- 37) C. Van Woodward, *The Strange Career of Jim*, 2nd revised ed. (Oxford: Oxford UP, 1966), 173.
- 38) Henry Hampton, Steve Fayer, and Sarah Flynn, *Voices of Freedom: An Oral History of the Civil Rights Movement from the 1950s through the 1980s* (New York: Bantam Books, 1991), 6.
- 39) James B. Meriwether, ed., *Essays, Speeches & Public Letters by William Faulkner* (New York: Random House, 1965), 223.
- 40) Regina K. Fadiman, *Faulkner's Intruder in the Dust: Novel into Film* (Knoxville: U of Tennessee P, 1978), 5.
- 41) Joseph Blotner, ed., *Selected Letters of William Faulkner* (New York: Random House, 1977), 393. 第二次世界大戦後の南部の新生の苦しみを地政学的に分析したイマヌエル・ウォーラーステインは次のように解説している—「1945年, アメリカが世界覇権大国の地位を占めると, 再び全てが変わった。国内に<後進的>な部分をかかえていることは, アメリカ連邦国家を支配する政治勢力の利益に合致しなくなった。黒人のような少数勢力の政治的権利を否定し続けることも, 同じようにその利益に合致しなくなった。アメリカの均質化が, アメリカ連邦国家にとって緊急の政治的—かつ外交的—必要事になった。<南部>の工業化や市民権法の施行は, みな<文化>の再編成という大きな構図の一部になった」。(I. ウォーラーステイン, 丸山勝訳『ポスト・アメリカ』—世界システムにおける地政学と地政文化) [藤原書店, 1991年], 337)。Immanuel Wallerstein, *Geopolitics and Geoculture: Essays on the Changing World-system* (New York: Cambridge UP, 1991), 213.
- 42) James Baldwin, *Nobody Knows My Name: More Notes of A Native Son* (New York: Dell, 1961), 104.
- 43) Croyden, 221.
- 44) Angelo, 257.
- 45) William Faulkner, "Dry September," in *Collected Stories of William Faulkner* (New York: Random House, 1950), 169.

- 46) Diane Roberts, *Faulkner and Southern Womanhood* (Athens: U of Georgia P, 1994), 170. ロバーツはクーパーが見る映画は、「トマス・ディクソン [Thomas Dixon] のクー・クラックス・クラン小説を基にした D. W. グリフィス [D. W. Griffith] の『国民の創生』(*The Birth of a Nation*) の類いではないか」(171) との卓抜な見解を示している。
- 47) Faulkner, "Dry September," 172, 171-72.
- 48) Theresa M. Towner, *Faulkner on the Color Line: The Later Novels* (Jackson: UP of Mississippi, 2000), 127. chivalry や honor という南部的な精神のコードについては, Bertram Wyatt-Brown, *Southern Honor: Ethics and Behavior in the Old South* (Oxford: Oxford UP, 1982) が参考になる。
- 49) John T. Matthews, "Shortened Stories: Faulkner and the Market," in Evans Harrington and Ann J. Abadie, ed., *Faulkner and the Short Story: Faulkner and Yoknapatawpha, 1990* (Jackson: UP of Mississippi, 1992), 23.
- 50) エドワード・サイード, 島弘之訳「冬の間 亡命生活についての考察」, 今福龍太・沼野充義・四方田犬彦編『旅のはざま』(岩波書店, 1996年), 75.
- 51) McMillen and Polk, 6.
- 52) 同論文, 13.
- 53) Towner, 121-23.
- 54) Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner, eds., *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia 1957-58* (New York: Random House, 1959), 211.
- 55) 拙著『ウィリアム・フォークナーの世界—自己増殖のタペストリー』(南雲堂, 1997年) の第V章「黒人の前景化—変化の予表」(251-329頁) を参照。

Structured Violence as a Form of Southern Culture: The Emmett Till Case and Faulkner's "Dry September"

TANAKA, Hisao

This article is an attempt to explore the structured violence in the South as a form of culture, focusing on such an actual outburst of violence as the Emmett Till case and on William Faulkner's "Dry September" (1931) as a fictional rendering of it. In *The American Way of Violence* (1972) Alphonso Pinkney detects the strong connection between American Calvinism and the Social Darwinism which helped to advance the tendency of American society to dichotomize human society into two groups such as the saved and the damned, the superior and the inferior, or the good and the evil—a dichotomization which was taken advantage of to justify black slavery and the massacre of Native Americans. William Styron presents in his masterpiece, *Sophie's Choice* (1979), the idea of the two greatest absolute evils in human history, which, in his view, were materialized in black slavery and the

holocaust: the slavery as a collective social enforcement of white supremacy and the holocaust as an outcome of the 'overdetermination' of many social influences, that is, a composite agency of anti-Semitism and other factors such as religion, economics, politics, or nationalism.

This article first highlights an episode in Ernest Hemingway's *The Sun Also Rises* (1926) in which Robert Cohn was awakened to his Jewish identity and the latent habitus of anti-Semitism at Princeton. We see the same kind of awakening in the Jewish character Nathan Landau in *Sophie's Choice*, who seems in the end to be crushed by the huge dogma of anti-Semitism. We can recognize the tremendous violence of anti-Semitism in society from the ordeal which the young Lionel Trilling experienced as a Jew at Princeton. In the same vein, we can see the agony of Franz Fanon's *Black Skin, White Masks* (1967), a work that makes a splendid analysis of the great bias of European Christian culture towards regarding the color black as a stigma, as it is closely connected with Satan, evil, immorality, or darkness—a bias which, in association with the concept of the great chain of being, seems greatly responsible for the view of black people as racially inferior in the human scale. Toni Morrison also draws our attention to such problems as "the pain of being black" in tightly racialized American society which had been shaped not only by the prevalence of Social Darwinism in the late nineteenth century but also by the enforcement of the Jim Crow laws and the twisted interpretation of the Bible endorsed by the idea of white supremacy.

The murder of Emmett Till, a fourteen-year-old black boy from Chicago, by two white supremacists, which took place in Money, Mississippi, in the summer of 1955, is symbolic of the structured violence, which resembles a Southern version of Louis Althusser's idea of "Ideological State Apparatuses" and which is based on the racial fanaticism peculiar to the Deep South. Morrison wrote a play entitled *Dreaming Emmett*, with the hope that the white and the black could make the nightmare their common memory. William Faulkner wrote a letter of grief and lamentation about this case to a newspaper, deploring the irredeemable violent bigotry of his native soil. In "Dry September" Faulkner describes such bigotry in a Southern small town as revealed in the ex-soldier's effort to maintain "the power structure in which they 'protect' women and terrorize blacks." Nevertheless, we should feel the shock of recognition, as if we were dazzled by the deep chasm between actuality and fiction, when we read his mysterious 1931 letter published in the *Memphis Commercial Appeal*, a letter saying that lynch mobs "have a way of being right."